

## 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

| 学位申請者 | 奥山 けい子【論文博士】<br>(比較文化学専攻 昭和58年9月単位修得退学) | 要 旨   |
|-------|---|---|
| 論文題目  | 明治期の能楽における交流と創造<br>—演者の移動による伝承の確保—      | <p>本論文は、明治維新後に能楽の地域伝承が生成した新しい基盤を明らかにすることを目的とし、19世紀後半から20世紀初めの、東京と他地域の能楽の演者について、その移動に着目し、地域間の関係や交流と創造の過程、技法と表現を明らかにするものである。</p> <p>資料としては、能楽関係者の著作、能楽関係雑誌、新聞、演能番組記録など、その多くは申請者が独自に見出した資料である。まず、第1章で、明治期の時期区分を小林責により示し、1903年の芝能楽堂建設を漸進期、そして1902年の『能楽』発刊から東京音楽学校能楽囃子科設置の1912年までを煥発期として、そこで松山出身の池内信嘉が囃子方養成の重要な意味を持つことを示した。第2章では、人材を育てた城下町として、池内信嘉と太鼓方の川崎九淵の出身地である松山、太鼓方柿本豊次の出身地である金沢を取り上げ、両都市での能楽生成の過程を明らかにした。第3章では、明治期に謡曲界を作った都市として青森を取り上げ、梅原稔による「青森に於ける謡曲」を読み込み、青森市の謡曲愛好家集団が都市に基盤を置くことを歴史的、地理的側面から検証した。第4章では、村落が育てた歌唱様式として、東北地方各地で伝承される、御祝、という民謡の歌唱様式について、謡との同時並置などの演奏様式などをもたらした謡曲の需要とその教習のあり方を示した。そして、第5章では、村落を基盤に伝承されている能楽として黒川能を取り上げ、その出張公演の記録を検討し、その公演の目的や特徴、用途などを明らかにした。</p> <p>以上のように、この論文では、地域に伝承される能楽について、4つの観点から都市の基盤の上で新しい伝承のかたちを形成したことが示された。一つには東京の能楽の基盤となる人材を輩出したこと、それは松山と金沢の能楽師がその都市の伝承を保ちながら、かつ東京の能楽の厳しい状況を回復するに足るエネルギーたる力を供与したことである。二つ目には、明治以降の新都市である青森において、謡曲愛好家たちの集団が成立し、都市ならではの交通と情報の要所として、伝承の基盤を形成したことである。三つ目には、江刺を中心とした村落において、謡曲と民謡とが独自の並置する歌唱様式を作り上げたことであり、そこには地域が民謡や謡曲に対して積極的な姿勢を持っていたことがわかる。四つ目には、村落に形成された能楽として様々に研究のなされている黒川能において、周辺地域に出張公演を行ない、その目的や用途など多様なあり方が展開されていたこと、つまり黒川を中心とした能楽文化の基盤を形成していたことが明らかになったことである。</p> |
| 審査委員  | (主査) 教授 永原 恵三                           |   |
|       | 教授 秋山 光文                                |   |
|       | 准教授 神田 由築                               |   |
|       | 教授 鷹野 光行                                |   |
|       | 教授 小風 秀雅                                |   |